

児童生徒との適切なかわり方についての考察 —教室マルトリートメントの事例から—

学校構想サブプログラム

坂本 勇真

【指導教員】 船橋一男、磯田三津子

【キーワード】 マルトリートメント・学級崩壊・学級経営

1. 課題設定

本研究は、昨年行った課題研究で家庭教育及び家庭内環境が子どもの人格形成においてどのような影響を及ぼすかを学んだ。その際に父母の家庭内の喧嘩などの家庭内での養育態度が子どもに多大な影響を及ぼすことが明らかとなった。それらは直接的に子どもに干渉していなくても起こることであり、親の夫婦喧嘩を日常的に見ることで、子どもに悪影響を及ぼす。それらは「マルトリートメント」と呼ばれるということが分かった。また、子どもを委縮させてしまうような高圧的な指導や態度、「指導」という名のもと、人格を否定するような心無い叱責などを目にし、指導なら何をしてもいいのだろうか、指導の際であれば、子どもの権利をも否定していいのだろうか、と、教師という職のあり方に疑問を持った。昨今の教育界では教師の不祥事が多く見受けられる。わいせつや体罰などをはじめ、子どもへの不適切なかわり、すなわちマルトリートメントである。

マルトリートメントがそのようにして引き起こされるのならば、学校や学級でも同様のことが起きるのではないかと考えた。学級崩壊や行き過ぎた指導（過度な叱責や体罰、教師—児童間双方の暴力など）によって、同じ教室にいる他の児童にも悪影響を及ぼしてしまうのではないかと考えた。またそれらを総称して「教室（学級）マルトリートメント」と呼ばれていることがわかった。「教室マルトリートメント」とは川上康則氏の造語である。本論文では教室マルトリートメントの実態を明らかにし、それらの問題にどう向き合っていくのか、そのうえで児童生徒との適切なかわりについて明らかにしたい。

2. マルトリートメントの定義

ここでいうマルトリートメントとは、2021年7月11日放送のNHK「サイエンスZERO」では、幼少期に体罰、暴言、無視、目の前で夫婦喧嘩などのマルトリートメントと呼ばれる行為を行うと、脳の発達に悪影響を及ぼすことが分かってきたのだという。マルトリートメントとは、諸外国では、「マルトリートメント」という概念が一般化している。諸外国における「マルトリートメント」とは、身体的、性的、心理的虐待及びネグレクトであり、日本の児童虐待に相当する。^{*1}

また、「マルトリートメント」という言葉は、欧米や国際社会では広い意味での子どもへの不適切なかわりすべてを意味します。Mal（マル=悪い）+treatment（トリートメント=扱い）でマルトリートメント。「不適切な養育」「避けたいかわり方」などの意味で使われます。世界保健機関（WHO）は、「18歳未満の子どもにかかわるあらゆる種類の身体的・心理的・性的虐待とネグレクト、商業的またはその他の搾取を行うこと、さらに責任。信頼または権力の関係の文脈において、子どもの心身の健康・発達・対人関係などに害をもたらすこと」を「チャイルド・マルトリートメント」と定義づけています。日本における児童虐待よりも広くとらえた内容であり、虐待とは言い切れないような、大人から子どもへの発達を阻害する行為全般を含めたものであると言えます。^{*2}

例えば、幼少期に体罰を受けたグループでは理性を司る前頭前野の一部が19%委縮していた。この部分が委縮すると犯罪の抑制力が低下したり、気分障害を引き起こしたりする危険性があることが分かった。同様に子どもが親同士の激しい夫婦喧嘩を見たり、ネグレクトを受けたりすると視覚野が委縮していたという。視覚野が委縮することによって、会話を理解する力や記憶力を低下させる。また、幼少期に暴言を受けたグループでは、聴覚野が14%肥大していた。聴覚野が肥大したことにより、情緒不安や自己肯定感が低下する。これらの脳の萎縮の結果として、コミュニケーションを取るなどの対人関係に問題を生じさせるという。

マルトリートメントは愛着障害の引き金になる。親との心理的な絆が築けないことで様々な悪影響を及ぼす。愛着障害で起こる行動として、①精神的に不安定になる。②暴れたり、人に暴力をふるったりする。③感情のコントロールが苦手になる。④人と人との適切な距離感がつかめない。（初対面の人になれなれしく接する。）⑤愛着障害により、親が安全基地にならない。

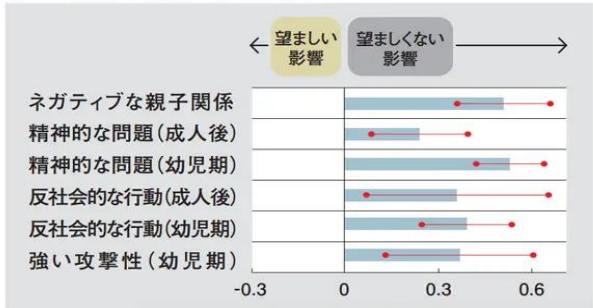
脳の中で何が起きているかの研究も進んでおり、ネグレクト経験者の中には、脳の前頭前野の働きが低い人が多く見られた。これは脳の神経回路を増強するミエリンの形成が阻害されたからだという。マウスの実験では、孤立させたマウスの脳のミエリンが正常に形成されなかった。また、このマウスは落ち着きがなく、攻撃的になった。

脳の免疫系の働きに着目した研究もある。脳内の免疫細胞であるミクログリアは脳内に入り込んだ細菌などを攻撃

する働きがあるが、強いストレスがかかると、正常な神経細胞まで攻撃してしまうことが分かった。

体罰が子どもに与える影響においては、「世界 111 の研究 16 万人のデータ」によると 1 つとして望ましい結果は出てこなかった。

● 「親による体罰」の影響



*³

3. 教室マルトリートメント

マルトリートメントとは「18 歳未満の子どもにかかわるあらゆる種類の身体的・心理的・性的虐待とネグレクト、商業的またはその他の搾取を行うこと、さらに責任。信頼または権力の関係の文脈において、子どもの心身の健康・発達・対人関係などに害をもたらすこと」と述べたが、教室マルトリートメントとはどのようなものを指すのか。川上 (2022) によると次のようなことが教室マルトリートメントにあたるとされている。

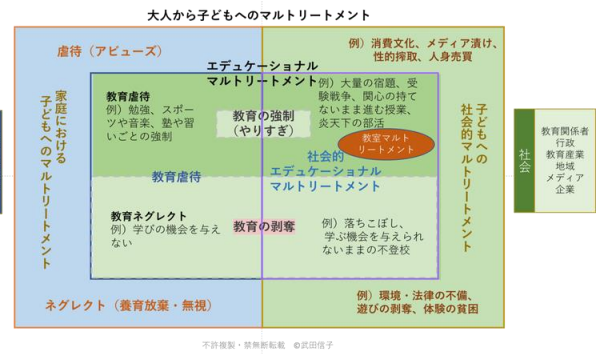
ネグレクトに類似したかわり

- ・励ましや賞賛などをしない
- ・特定の子の使命を避ける (賢い子の場合、「指名するとすぐに答えを言われてしまう」という心配から教師が使命を避ける傾向もある。この場合、指名を避けられた子どもの心の中にくすぶりや教師への不信任が生まれることがある。)
- ・支援が必要な子の合理的配慮を行わない (ちなみに国公立学校の場合、「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」において「合理的配慮の不提供は差別にあたる」とされている)
- ・必要な授業準備を怠る
- ・取り組むべき学級の課題 (いじめや差別的発言等) を放置する
- ・支援が必要な子を支援員や介助員に「丸投げ」するような対応をとる
- ・「勝手にすれば」「さよなら」等の見捨てる言葉等

心理的虐待に類似したかわり

- ・威圧的、高圧的な指導
- ・力で押さえる指導
- ・子どもが自信をなくすような強い叱責
- ・子どもの人格を尊重しない言動
- ・子どもの主体的な行動を妨げる指導等

また、武田 (2021) は下記の図を用いて川上氏の教室マルトリートメントをまとめていた。



*⁴

図の右下に「落ちこぼれ」とあるが、経済産業省・浅野 (2019) は次のように語っている。「日本の学校では、授業の進行はクラスの平均値に合わせて進めていきます。そのため、1 つの教室の中に授業についていけない「落ちこぼれ」と呼ばれる生徒たちがいるのと同時に、「吹きこぼれ」と呼ばれる「理解度が早いゆえに、授業がつまらなく感じる」生徒がいることです。このとき、理解度の早い子が遅い子に教える「学び合い」は、学習面では有効です。

「理解度の遅い子」は、「早い子」に教えてもらうことで理解が深まり、「理解が早い子」は「遅い子」に教えることで、自分の理解が深まるというメリットがあります。また、この「学び合い」によってクラス全体に「みんな絶対に合格点を取ろう」というのが目標になり、クラス全体の平均値が上がったりもします。

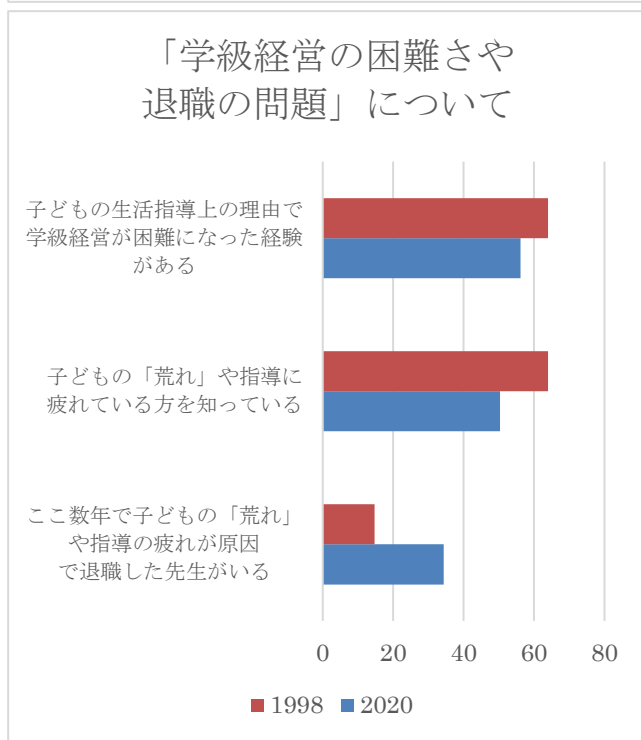
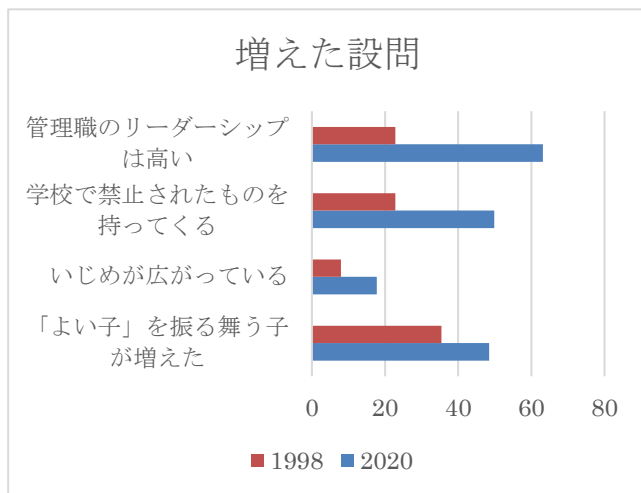
ただ、それもほどほどにしないと「吹きこぼれ」の子どもたちにとっては、ずっと社会奉仕させられている状態になります。*⁵

上記のことは全学校で起きていることといえるだろう。習熟度別にクラスを分けて授業を行う。クラスを分けることで、できる子とできない子の学力格差を助長していると考えた。このことも教室マルトリートメントにあたると考える。そもそもできる子は授業が退屈してしまうから、できない子はできないまま授業が進んでしまうから、といった理由で習熟度別クラスが取り入れられた。逆に言えば、できる子はもっと高いレベルの問題を解かせる。できない子はゆっくり授業内容を理解して進める。浅野氏の言葉で言えば、「できる子=吹きこぼれ」だけにスポットが当てられているようにしか思えない。これは能力主義が根底にあると考えるが、こうして「できる子」の育成や選別・区別も教室マルトリートメントに十分該当すると考えた。

4. 学級崩壊と教室マルトリートメント

教室マルトリートメントを述べるうえで、「学級崩壊」と密接な関係を持っていることを押さえておかなければならない。近年の学級崩壊について、白梅大学教授の増田修治氏は、「静かな荒れ」と「激しい荒れ」の 2 種類が存在すると

述べている。また、1998年に大阪府の民間教育機関「授業研究所」が行った、府内や和歌山県の小中学校教員412人へのアンケートと2020年3月に文部科学省から出された「学級状況調査」を比較し、グラフ化した。



このデータを増田は次のように分析した。

一見「よい子」を演じながら、「学校で禁止されたものを持ってくる」ことで、連帯感を深めようとする姿であった。また、「いじめてはいけない」とわかっているにもかかわらず、いじめに向かうストレスをためた姿も見られた。

筆者が、小学校の授業を見学した時に、教師がいくら指示し、あれこれ説明しても全く答えないどころか一言も発しない授業の姿をたくさん見ることがあった。「教師が一生涯懸命説明しても、45分間もの間クラス全員の子どもが一言も言葉を発しないこと」がどれだけ教師の自信を根こそぎ奪い取っていくか想像してもらいたい。

6年生からの担任だったのだが、5月の連休明けには教師の指示は全く通らず無視をし、机の下でマンガ本を読んでいる有様であった。

結局2学期あけの9月末には、全くの反応がないクラスの子どもに業を煮やし、手をあげてしまったため、退職するという残念な結果になってしまった。

こうした姿は、特に高学年に多く見られるのであるが、こうした「一言も発しない授業の姿」や「よい子を演じながら、その裏でいじめをしている」姿を総称して、「静かな荒れ」と考えている。⁶

また、「激しい荒れ」も存在しているといい、教職員への暴力や暴言、子ども同士の暴言や暴力が激しく、他者を力で支配しようとする姿などが、激しいとのことであった。クラスを実際に観察してみると、絶えず子どもがおしゃべりをしているのである。床も汚く、ごみが散乱しており、だれもごみを拾おうとしない。それどころか、筆者の目の前で鼻をかんだティッシュを床に投げ捨てていた。授業中、「教科書忘れた〜！」と大声で叫び続ける男子児童が授業の雰囲気壊していた。教師の話をしている児童は、7〜8人であった。⁶

実際に私自身、学部時代の教育実習や教職大学院の実地研究では、「静かな荒れ」と「激しい荒れ」の両方の姿を目にした。「静かな荒れ」が起きていた学級では教師の力が強く、子どもは「先生に怒られる」ことを恐れているようであった。また、実際に問題が起きた時には激しい叱責などが見受けられ、教師の目が行き届くところでは「よい子」を演じるようにしていた。一見授業中などは静かに話を聞いているように見え、統一が取れているクラスだと感じた。しかし実態は教師の目が届きにくい水面下で問題が起こっていたのだ。『激しい荒れ』のクラスは教師の指示を聞かない児童が数人見受けられ、それらの児童に引っ張られて日を追うごとに問題行動を起こす児童が一人、また一人と増えていった。また、そのクラスの秩序は崩壊し、クラスメイトに手をあげる事例も多々あった。問題を起こしてしまう児童と時間をかけて話をしていく中で、「どうして先生の言うことを聞かないの？」と問いかけた。その児童は「先生が嫌い」「先生は僕の言うことを聞いてくれないから、僕も先生の言うことは聞かない」などと言っていた。また指導の際、日常的に「(該当学年よりも下)〇年生に戻りな」「さよなら」などの突き放す・見放すような言葉や、児童の行動や存在自体を見えていないものとするような、まるで指導とは呼べないようなことも見受けられた。したがって、児童の先生への不信任は増すばかりであり、悪循環だと感じた。

児童の問題行動とは、教師へのSOSである。子どもたちは十分に言語能力が発達しておらず、言葉で助けを求めることができないのである。また、無意識のうちに子どもから助けを求める「シグナル」が出ており、教師はそれらを受け取らなければいけないと考える。「問題行動」と片付けるのではなく、「(子どもの中で起きている)問題を提起するための行動」だと考え直すべきである。

学級崩壊が起こると学級は無法地帯になり、「いじめ」や「暴力行為」が日常化する。キングス・カレッジ・ロンドンの発達心理学教授である Louise Arseneault (2018) が、『小

児期および青年期にいじめられることの持続的かつ広範な影響:政策と実践への影響』の中で次のようなことを述べている。

- ① 世界40ヶ国対象のWHOの調査によると、11歳の子どもの13%がいじめにあっている。
- ② 2009年のヨーロッパ11ヶ国の調査では、8～18歳の子どもや若者の20%がいじめの被害者となっている。
- ③ いじめを受けた子どもは、学校に適應することを困難に感じ、社会的疎外感を感じる傾向が強い。
- ④ 自傷行為や自殺念慮を抱くリスクが高く、不安障害やうつ病の問題につながる。
- ⑤ 子どもの頃にいじめられた男性は、18～23歳の間に、不安障害発症リスクが高い。
- ⑥ 9～16歳に複数回いじめられた経験者は、10年以上経過後も精神疾患を患う。^{*7}

学級崩壊が起こり、学級の秩序が失われると、目の前で「いじめ」や「暴力行為」が起こることで、その時だけではなく、大人になっても影響を受けることが分かった。

このように「学級崩壊」と「教室マルトリートメント」はとても密接な関係を持つのである。

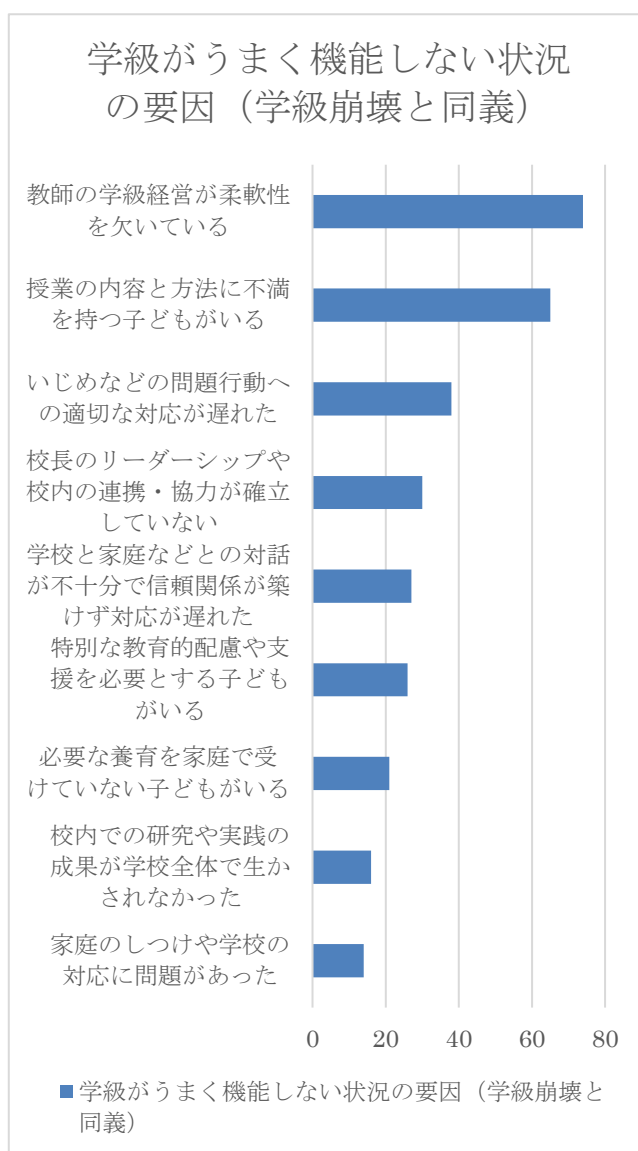
5. 教室マルトリートメントの防止

これまで教室マルトリートメントとはどのようなものかやどのように引き起こされるのかを述べた。教室マルトリートメントの背景には、教師自身の教育観、他の教員からの圧力、などがあげられる。

まず、教師自身の教育観について、学級経営をするにあたり、「こんなクラスにしたい」「こんな児童生徒を育てたい」などと誰しも見通しや自分の教育観を思い描くだろう。もちろんそれらは学級経営を行う上ではとても大切であるといえる。しかしその教育観や基準を押し付けてはいけない。自分の「型」に子どもたちを当てはめるような指導はマルトリートメントにつながると考える。教育の主体は、あくまでも児童生徒なのであって、教師ではない。子どもたちは誰一人として同じことはない。一人一人個性がある。そうした個性を教師の勝手な物差しにあてがい、変えようとするのはあってはならないのである。川上(2022)は「プロクルステスのベッド」というギリシャ神話を用いて説明した。

「プロクルステスは、疲れた旅人に『ベッドがあなたにぴったり合うようならばその場で休める』と誘います。旅人が大きくてベッドからはみ出せば、はみ出した部分を切り落とし、旅人が小さければ引っ張って引き裂いたという。決して合うはずのないベッドに載せ、無理やり人間をベッドに合わせてその命を奪うという神話は語り継がれ、『人には、自分の基準に無理やり相手を当てはめようとしてしまうことがある』といった教訓をもたらします。」^{*8}

下の図は「学級経営研究会」(国立教育研究所内外の研究者や学校現場の関係者等で構成)が2000年に出したデータをもとにグラフ化したものである。



学級崩壊の背景要因として最も多い項目が「教師の学級経営が柔軟性を欠いている」ことである。

このことは教師が児童生徒を見つめなおすきっかけを与えてくれるだろう。教師の「型」に無意識に当てはめようとしていないか。学校や教室は常に予想外のことが起きる場である。子どもたちは奇想天外であり、大人の我々の想定を上回るような考えを持っている。そうした豊かな考えや発想を抑圧せず、素晴らしいものだと思える姿勢が大切である。子どもたちを変えようとするのではなく、子どもたちに合わせて教師側が変わっていく、ある種の「柔軟性」がマルトリートメントを防止できると考えた。しかし児童生徒に合わせて教師が変わっているのは、一斉指導ができない上に、個別で指導に当たる教員も十分にいないわけではない。教師の多忙化についても解決していくべきである。

次に児童生徒と信頼関係を築くこと。当たり前にも思えるかもしれないが、大切なことである。荒れた学級の子どもたちは教師と十分な信頼関係を築けていないと感じた。また、実習で児童に聞いたように、教師への不信感から問題行動に発展してしまうことがあり、今一度信頼関係づくりの重要性を見つめなおしたい。

具体的に言及すると、よく話すこと、たくさんほめること、不満や鬱憤を聞いてあげること、学級の問題を放置しないこと、などが挙げられる。実習などを経験して、信頼関係を築くには時間と労力が必要であった。毎日些細なことでも話しかけたり、小さなことでもほめたり、焦らず時間をかけて初めて、子どもと信頼関係が築けたと実感できた。また、話しかけることに固執せず、そっとしておくことも大切であり、適切な距離感で子どもたちと接することが信頼関係構築につながる。

信頼関係を築いたうえで、指示や説明などが通りやすくなり、児童と教師が協働でクラスの良い雰囲気を醸成していくのである。増田はこれを「柔らかな学級づくり」と呼び、子ども主体の学級作りの重要性を示した。そのための方向性として、次の8項目が重要である。

- ① 「友だち百人できるかな？」を目指させない。
- ② 「スタンダード」に依拠しない学級づくり。
- ③ 子どもの凝集性をほどほどにする。
- ④ 子どもへの言葉の二重性に気付く。(表側のメッセージと裏側の隠れたメッセージである「ヒドウンメッセージ」に気を付ける)
- ⑤ 荒れている子どもたちの内面の声を聴く。
- ⑥ 学校を、子どもにフィットするものにしていく。
- ⑦ 子どもの「自己決定権」を尊重する。
- ⑧ 学級を作るのは、子どもの力を抜きには考えられない。子どもの力に依拠して学級作りをし、子どもを学級の主人公にする。⁹⁾

次に、言葉遣いに気を付けること。子どもの模範となる立場として言葉遣いに気を付けることは当たり前であるが、ついつい強い言葉を子どもたちに投げてしまっていないだろうか。そもそも、子どもの自尊心を傷つける言葉や自信を無くすような言葉、汚い言葉など、逐一立ち返る必要がある。実習で聞いた「〇年生に戻りな」などは子どもの自己肯定感や自尊心を大きく傷つけたであろう。「さよなら」や「勝手にすれば」などの突き放す・見捨てるような言葉は、「先生は自分のことを見てくれない」と教師への不信感につながる。また、強い言葉も使ってしまうがちである。感情的になってしまったときなどについて出てしまうことがあるが、強い言葉は恐怖で子どもを従えているといえるだろう。強い言葉での指導や叱責は教室を恐怖で支配するだけではなく、子どものパニックやフラッシュバックを引き起こす引き金となる。これらの避けるべき言葉を川上氏は「毒語(川上の造語)」と呼び、教室の雰囲気を一変させるという。

毒語は、子どもの発達の阻害要因となり得ます。教師、支援員や介助員などの指導者の口から出やすいものであり、知らず知らずのうちに子どもの心を傷つける(トラウマをつくる)危険があります。そして教室の雰囲気を不穏なものに変せてしまうという性格も持ち合わせています。

毒語の例

質問形式で問い詰めるような毒語

- ・「何回言われたら分かるの？」
- ・「どうしてそういうことするの？」
- ・「誰に向かってそんな口のきき方するんだ？」

本当の意図を語らずに、裏を読ませるような毒語

- ・「やる気がないなら、もうやらなくていいから」(本当は「やりなさい」)
- ・「勝手にすれば」(本当は「勝手なことは許さない」)
- ・「あなたの好きにすれば」(本当は「いうことを聞きなさい」)

脅して動かそうとするような毒語

- ・「早くしないと、〇〇させないから」
- ・「じゃあ〇〇できなくなるけどいいんだね」
- ・「もうみんなとは〇〇させられない」

虎の威を借るような毒語

- ・「お母さんに言うよ」・「お父さんと呼ぶよ」
- ・「校長先生に叱ってもらうから」

下学年の子と比較するような毒語

- ・「そんなこと1年生でもやりません」
- ・「そんな子は1年生からやり直してください」
- ・「保育園(幼稚園)に戻りたい？」

見捨てるような毒語

- ・「じゃあ、もういい」・「さよなら」・「バイバーイ」
- 指導的な立場にある大人は全て、自分の発する言葉一つ一つに、もっと敏感にならなければなりません。これらの毒語は、多くの子どもたちを恐怖や不安の底に陥れます。

毒語が出てしまう背景には、必ずと言ってよいほど大人側の「焦り」があります。毒語は、早く子どもを動かしたい、指示通りの姿にさせたいという大人の焦る気持ちの裏返しです。¹⁰⁾

これまで教室マルトリートメントを防ぐための留意点を述べてきたが、マルトリートメントが引き起こされる要因が教師の裁量にあるように思えてしまう。しかしマルトリートメントが起きる要因はそれだけではない。川上(2022)によると、「教師もまた型にはめられる」と述べている。

「教師もまた、教育行政や管理職から想定される枠や型に無理にあてはめられていることがあります。その事実を極めて強く感じさせるのが、各自治体の教育委員会から示されている『求める教師像/求められる教師像』です。(略)

『成功モデル』の押し付けや『プロクルステスのベッド』のエピソードは、実は、国や自治体の教育委員会、管理職などのマネジメント層から現場教師に向けられたものでもあると言えます。そしてそのストレス状況が、教師から子どもたちにも向けられてしまうとしたら…。教室マルトリートメントは、こうした『負の連鎖』の結果として生み出されているのではないかと思います。¹¹⁾

このように、マルトリートメントが教員の裁量だけが要因であるとは言えないのである。また、昨今の教育界では、わいせつや体罰などの教師による不祥事が後を絶たない。そうした中で、「教師」という職の信用がつかないほどに

揺らいでいるのではないだろうか。不祥事の汚名を挽回しようと、無意識のうちに教師としての良い姿を見せよう、自分の学校・学級では問題を起ささせまい、とした思いから、学級マルトリートメントにつながるような指導をしてしまうのではないかと考えられる。

6. 教室マルトリートメントの改善

5では教室マルトリートメントの防止策を主に述べた。これまでに挙げたどのようなことが教室マルトリートメントに該当するかについて、「こんな細かいこと、些細な事までマルトリートメントに該当するのか」と思うこともあるだろう。または、そうした行動や言動をつい使ってしまうこともあるだろう。そうした「教室マルトリートメントに陥ってしまったとき」どのように脱却していけばよいのかを検討したい。

まず、自分の教師としての立ち振る舞いやクラスの様子などを客観視すること。自分だけでは認知バイアスなどが発生してしまう可能性もあるので、同僚やほかの教師などに見てもらうことが望ましいと考える。また、自分自身でも指導や発言に責任を持ち、立ち返ることを忘れないようにしたい。

次に毒語の改善である。毒語という言葉を考えて川上(2020)は毒語の改善について、次のように示している。

質問形式で問い詰めるような毒語

- ・「何回言われたら分かるの？」
- ・「どうしてそういうことするの？」
- ・「誰に向かってそんな口のきき方するんだ？」

→問い詰めたところで、かえって怒りがこみ上げる結果に陥る。もし反射的に口から出てしまったときは、「そんなこと言われても、すぐには変わらないよね、ゴメン」、「自分でもやっちゃう理由がわかっていたら、苦労しないよね」と即座にフォローするようにする。

本当の意図を語らずに、裏を読ませるような毒語

- ・「やる気がないなら、もうやらなくていいから」（本当は「やりなさい」）
- ・「勝手にすれば」（本当は「勝手なことは許さない」）
- ・「あなたの好きにすれば」（本当は「いうことを聞きなさい」）

→「一緒にやりましょう」「こちらに合わせてほしいです」と教師側の真意、本当の気持ちを率直に伝えたほうが、嫌みや皮肉っぽくならず済む。「やる気なんて出ないよなあ」と、一度受け入れるような言葉がけなどもよい。

脅して動かそうとするような毒語

- ・「早くしないと、〇〇させないから」
- ・「じゃあ〇〇できなくなるけどいいんだね」
- ・「もうみんなとは〇〇させられない」

→「〇〇君がやるまで、先生も好きなことをあきらめる」と、目標を共有する同志のような立場に立ってみる。こうすることで「子どもから奪う」のではなく、同じ境遇に身を置いて、

対等に「大切なものを断つ」といった覚悟が伝わる。

虎の威を借るような毒語

- ・「お母さんに言うよ」・「お父さんを呼ぶよ」
- ・「校長先生に叱ってもらうから」

→虎の威を借るような言葉は、教師の力不足を露呈しているようなものである。最初は通用するかもしれないが繰り返されるうちにその人の言うことは聞かなくなる。「先生もお手上げだな。校長先生にそう伝えさせてください。一緒に謝るよ」という言い方であれば、毒語のニュアンスは少しは薄れる。

下学年の子と比較するような毒語

- ・「そんなこと1年生でもやりません」
- ・「そんな子は1年生からやり直してください」
- ・「保育園（幼稚園）に戻りたい？」

→学年で物事を判断する切り口は、教師側の認知バイアスによるところが大きい。学年を跨いで比較したり評価したりすることは厳に慎むべきである。「この学年としての期待を込めて言ってしまった」「もしこの期待が、あなたの重荷になってしまったのだとしたらごめん」と付け加える。

見捨てるような毒語

- ・「じゃあ、もういい」・「さよなら」・「バイバーイ」

→見捨てるような言葉は、子どもの心に深く刻まれ、トラウマ（心的外傷）として残り続ける。ネグレクトに類似した言葉であり教師に言われた言葉であるだけに、心理的な圧迫はかえって深刻かもしれない。「さよなら。バイバーイ……と言いつつあつちで待っているからね〜」という言い方で最後まで見捨てないことを強調することも改善の一歩になると思う。

「毒語」は、教育や指導の名を借りた「マルトリートメント」である。毒語を口から放った瞬間、教師は子どもに勝ったような気分になり、ほんの一瞬だけ、すっきりした気持ちになるかもしれない。しかし、一度口から出た毒語は、直後に言い換えやフォローをしたとしても、もう前には戻せない。誤って行ってしまったときの改善案を述べてきたが、そもそも事後のフォローにエネルギーを使うくらいなら、最初から子供を傷つけるような言葉を「言わない」ことを徹底するほうが良い。^{*12}

前にも述べたが、教師は子どもの模範となる立場である。教師がよく使う言葉や所作などを子どもは真似る。日頃から言葉遣いには気を付けていかなければならない。また、教師という大人からの「言葉」は、子どもにとって一生残るものであり、そういった責任という点でも気を引き締めなければならない。学級経営を行うにあたって、だれかを卑下するような言葉ではなく、賞賛などが飛び交うクラスを作りたいと考える。

また、教師の多忙化についても改善するべきだと述べた。マルトリートメントにあたるような指導の背景には教師の余裕のなさなども要因の一つだと考える。ゆえに強い言葉などを用いて、児童生徒を管理・統制しようとするのではないだろうか。これらを解決するには教師の働き方改

革などが喫緊の課題となってくる。解決策としては、教育現場の人員補充や職務の細分化などを行うことによって、教師の心の余裕などが生まれ、マルトリートメントの防止につながるのではないかと考える。今、学校現場では人手が足りずに教師一人が担うべきではないほどの仕事がかかっている。人員を補充することで、児童生徒に向き合える時間が増えたり、教師の心の余裕ができ、柔軟な指導を展開できたりするのではないかと考えた。

7. おわりに

これまで教室マルトリートメントについて述べてきた。実習や実地研究で、教室マルトリートメントにあたるようなことが自然と起きていて、またそれらを疑問に思う様子もなかったように感じた。それでは子どもたちの豊かな人間性や創造性を伸ばしていくことができないと感じた。

これから教師になる立場として、子ども一人一人に目を向け、柔らかな風が吹く、あたたかな学級を作っていきたい。しかし、安全性に欠けることや、命の危険を脅かすなどの状況については毅然とした態度で指導にあたるべきである。また、人それぞれ自分の中で「どうしてもこれだけは譲れない」ところがあるだろう。しかしこれには危険性を孕んでいて、注意が必要である。どうしても譲れないラインの設定は、子どもたちと相談して決めたり、子どもたちの実態や能力にあった基準で設けるべきである。問題行動が起きた際に、ルールを厳しくしたり、防止するための決まりを作ったりすることは、問題を防止する一つ的手段ではあるが、その基準を見誤ると、叱ることが増えてしまったり、子どもたちが互いに監視しあうような学級の雰囲気を作りかねない。最初にも述べたように、命に係わることなど以外のこだわりはあまり必要ないように思える。また、「スタンダード」などの予め決められているものに則るのではなく、子どもたちに沿って変わる「柔らかな学級」を作っていきたい。

また、「スタンダード」とは「学校スタンダード」などと呼ばれ、学校の「きまり」などを定め、子どもたちや保護者、教師などにそれに則り、指導するというものである。教師は学校で30名前後の学級を運営する。その際に人格や規律意識がまだ未成熟な子どもたちを集団生活させるためには、必要最低限のルールや規則を設けることは必要であるといえる。そうした規律やルールを重んじる考え方に関して、小林(2017)は次のように述べている。

荒れの広がりや低年齢化に悩む地域では、父母・保護者の間から「落ち着いた学校生活を保障してほしい」「高校へ行けるだけの学力をつけてもらいたい」「問題を起こす1人のために99人の子が犠牲になってもいいのか」といった要求があり、そのために「特別な指導」によって一部の子どもを排除することに理解を示す向きもあります。

また学校側にも、比較的荒れの激しい学校では「やむを得ない」とする空気があります。多忙の中で、生徒指導にマニュアル化された指針があれば確かに指導方法を考える必要も

なくなり、心身への負担は軽減されるのかもしれませんが。さらに、ここ数年の間に急増した青年教師たちの間に、『規程』があることで生徒指導がしやすい「指導の公平性が保たれる」と、これを支持する声が多くあることも無視できません。青年教師に集中的に繰り返される多忙攻撃によって、教育の自由と創造性を奪われ、心身ともに疲れきったその間に「規程」が入り込んでしまった、というのが現実です。^{*13}

結果が良くなったからと言って、その指導が適切だったとは言えない。問題行動が起きた際に、子どもの不満や不信につながる指導で抑圧しては、後々違う形で問題が噴出するだろう。ここで気を付けなければならないことが、「過程」を大切にすることである。学校の問題がなくなる・減ることはもちろん望ましいことであるが、そのためにどんな手段を選んでもいいとは言えない。

スタンダードに則ることは、教師としての力量がまだ十分ではない新任などの教師にとってはとても助かる「マニュアル」のようなものになるだろう。しかし、子どもたちの実態に合わせて用いないと、規則や決まりで子どもを縛り付ける「ブラック校則」のようなものになる。

最後に、学校スタンダードに関しては本論文では十分に調べられなかった。また、「教室マルトリートメント」が実際の学校現場でどのように起きているかなども十分に調べられなかった。これらについては、今後の研究課題にしていきたい。

謝辞

本論本の執筆にあたっては、主指導の船橋先生、副指導の磯田先生に丁寧なご指導をいただき感謝申し上げます。

また、白梅大学の増田修治先生には終始多大なご指導を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。

引用・参考文献

*¹ 森下正康(2001)「幼児期の自己抑制機能の発達(3)一父親と母親の態度パターンが幼児にどのような影響を与えるか」和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要No 11 87-100

*² ⁸ ¹⁰ ¹² 川上康則(2022)「教室マルトリートメント」東洋館出版社

*³ 厚生労働省(2020) 健やか親子21(健やか次世代育成総合研究事業) 体罰によらない育児推進資料「子どもを健やかに育てるために～愛の鞭ゼロ作戦～」

*⁴ 武田信子(2021)「やりすぎ教育:商品化する子どもたち」ポプラ新書

*⁵ 浅野大介(2019)「日本は『落ちこぼれ』も『吹きこぼれ』も作らない教育が求められる」

[日本は「落ちこぼれ」も「吹きこぼれ」も作らない教育が求められる【経済産業省・浅野大介さん】 | ママスタセレクト](#)

[ト \(mamastar.jp\)](http://mamastar.jp)

*⁶ ⁹ 増田修治 (2020) 「静かな荒れ」と「激しい荒れ」から、現代の子どもをひもとく—子どもたちの現状から見える現代という時代— (私家本)

*⁷ Louise Arseneault(2018) 「The persistent and pervasive impact of being bullied in childhood and adolescence:implications for policy and practice」— 2— *Journal of Child Psychology and Psychiatry*

*¹³ 横湯園子・世取山洋介・鈴木大裕編著 (2017) 「ゼロトレランスで学校はどうなる」 花伝社